

同居して洋裁店に勤めていた姉が世話をしていましたが、手術の繰り返しから重体となり、母が付き添いに
行きました。しかし、八月末には弟が盲腸となり一関
病院に入院したため、母に連絡し戻ってもらったので
した。

二十四年五月、釜石製鉄所の従業員募集に応募し、
入社しました。

私の生きざま

長崎県 松 永 四 郎

私は、佐世保市の片田舎の農家で育った。私の家は、
村落で一番の大百姓で、朝早くから夕方遅くまで、忙
しい毎日だった。家族は、祖父母と父母、そして私た
ち兄弟五人の九人家族で、長兄は農学校卒業後、朝鮮
で綿花栽培の枝手をしていた。次兄は交通事故で、身
障者として松葉杖の生活を余儀なくされ、通学時は、
私が兄の手足となって通った。その兄の癖には泣かさ

れたこともあった。それというのも、家を出て五分も
たたぬうちに、必ず忘れもの（紙代、保護者会費、学
用品など）を取ってきてくれと言ひ、そして言い出し
たら聞かない。また履物が気に入らない、取り替えて
きてくれと言う。あるときは、校門が見える所までき
たとき、何でもないことで家まで帰ったこともあった。
こんなことで、毎朝の全校朝会はほとんど遅刻をした。
こうした苦勞をしながらも、学校は楽しかった。

学校の帰りは兄とは別で、友達と楽しく遊びながら
帰った。杉の実鉄砲を作って撃ち合ひをした。花粉が
出るようになれば、鉄砲の弾にはならない。そこで石
を投げ、杉の花粉がパッと爆発するかのようになり、真っ
白な煙となるのを喜んだ。そのころは、花粉症などな
かったのだろうか。また、楠の実でも鉄砲を作った。
実の大きさに合わせて、竹の太さを選び作らなければ
ならない。それには小刀がよく切れることが、上手に
作る条件である。当時、私たちは誰でも小刀を持って
いた。時々切れ味比べをした。よい砥石で研磨しなけ
ればよく切れない。あるとき、「俺の小刀は髪の毛が

切れるよ」と言って、友達の顔を剃ってやった。そして、まゆ毛を半分くらい剃り落とした。変てこな顔になったと、みんなで大笑いをした。次の日、全校集会で、前日のまゆ毛剃り落としたのことに付いて、校長先生に叱られた。帰りに友達の家に謝りに行った思い出もある。また、暖かくなれば、水泳の許可が出る前から小川や堤で泳いだ。校区内の堤はほとんど泳いで回った。時には、桑の実で顔を真っ赤にし、または、ドベ(泥)を頭から体中に塗って、飛び込んで泳いだ。また深い堤の底まで潜ったりもした。けんかやいじめなどはなかった。みんな仲良しだった。春と秋、二回ある運動会も楽しみの一つであった。地区対抗リレーで、私が一番になっていたのに、ラストではびりになったこともある。また田舎の学校では、春と秋の二回、農繁休暇が三日ぐらいあった。いも掘りや稲の収穫の手伝いをした。いも掘りは、焼きいもをしながらの手伝いで楽しかった。

夕食は毎日八時ごろになっていた。九人全員が揃っての夕食は楽しかった。家の中は米俵でいっぱいだった。

た。農家の仕事は、次から次と尽きることがない。麦まきは寒くて、手伝いをさばって遊びにいった。正月の準備も着々と進み、門松作りやみかん採りと貯蔵の手伝いは、私たち子供の役目だった。正月がくるのが一番うれしかった。帽子や洋服なども買ってもらった。こうして、あわただしく年の瀬もおし迫ったある日、母が突然病気になって床に就いた。びっくりした。学校から帰って、「お母さん、病気はどうですか、治っていますか」と尋ねる毎日だったが、ついに入院してしまつた。次の日、弟たちは見舞いに行つたが、私は次に行くことにした。ところが、見舞いどころではなない。入院三日目に、母は突然死亡してしまつたのだ。十二月二十六日だった。皆驚き途方に暮れた。涙が出なくなるまで泣いた。母は五十歳だった。病名は、耳下腺炎だった。母の葬儀が終わり、納骨もすんだその夜、祖母が床に就いた。正月がくるといつて、今まで元気に働いていたお祖母さんは、どうしたのだろうか。往診も間に合わず、元旦に死亡した。七十歳だった。母とお祖母さんの二人の葬儀の悲運に泣き、疲労困憊

した父も、病魔に冒され入院した。そして、一月十四日には死亡した。死亡診断は腎臓炎で、五十七歳だった。家には姉と末の弟が、病気で床に就いていたので、父の葬儀は親戚の家で行われた。こんなことなど聞いたこともないゆえに、今となっては世間に対しても恥ずかしく、申し訳もなく、村の人にお会いすることさえつらい思いがした。そしてまた、末の弟までも死亡した。一月二十二日だった。姉は入院した。弟の葬儀など、どうして行われたのか思い出すこともできない。何が何だか他人事のような錯覚さえ覚え、そして、私の家の者はみんな死んでしまうのではないかと思った。学校に行ったら、私と弟が職員室によばれ、「君の姉さんは伝染病だから、君たちは明日から学校にこないでよい」と言われた。弟が、「欠席になるから休まないよ」と言った。検便の結果、叔父宅から通学することになったが、帰りは自宅に帰った。

私は進学どころではなかった。四月から高等科一年に入学した。中学に進学したのは男女あわせて五人だった。悔しかったが六年卒業で仕事に就いた友達も多かつ

たので、あきらめもついた。正月に買ってもらった帽子と服は着けていても、一人寂しさが増すばかりだった。弟は朝鮮の兄宅に行き、後、商船学校に行く。その後、姉は退院したので四人となった。やがて姉は結婚し、祖父は死亡した。後には、身障の兄と私の二人となった。仏壇の戸はいつも閉めていた。二人になっても、毎日が食べることに追われる日々だった。米俵はあっても、精米しなければならず、味噌も醤油も買わなければならなくなっていた。米を売って醤油を買った。一升十八銭だったことは忘れもしない。魚と肉は自給自足で間に合った。

ほんとうに勉強どころではなかったが、兄のすすめで、県立諫早農学校に入学した。まず驚いたことは、保証人が佐世保市長だったことである。いよいよ奮起して、勉強しようと覚悟を決めた。しかし農学校は卒業しても、あんな広い田畑が、あっちにもこっちにもあるのに、たった一人でどうしたらいいのだろうかと思いつけた。

さて、戦局はいよいよ拡大の一途をたどり、いつ終

わるとも想像さえつかない状況であった。こんなとき、兵隊に三年も行けば、田畑は荒廃して、手がつけられなくなることは明らかであった。早く退役する方法として、師範学校に行くことである。すると兵役は、五カ月で除隊することができるので、早く農業経営に手をつけることができるの思いで、師範学校に行くことを決めた。そして、卒業と同時に入隊となった。今や百姓どころではない時であった。粉骨碎身、国のために尽くす覚悟を決めた。そしてさっそく、ソ満国境警備の任についた。昭和十六年三月、ちょうど太平洋戦争勃発の年であった。

昭和二十年一月十九日、南方戦線に転戦のため、第十二師団司令部と共に、歩兵第四十六連隊の精鋭もソ満国境警備を終え、門司港に着いた。翌日から夜を徹して、馬来丸に軍馬、自動貨車、大発や舟艇その他、軍需物資などの搭載を終え、兵員千九百有余人も乗船して、同月二十三日、門司港を出港し、鹿児島港に向かった。途中護衛艦や航空機による哨戒に、何となく敵潜水艦の脅威を感じながらも、窮屈で身動きすら自

由にできない。しばらくすると船内生活に退屈し始めた。

同月二十五日昼前、だれかが汲んできてくれた真水で洗面をした。久しぶりの洗面だったので、数人でまわして使った。食べて寝ることだけが楽しみの船内生活を送っていたが、その日に限って、その食事が三十分以上も遅れていた。だれもが「麦だなあ」と言いながら食事を待っていた。対潜監視の交代時間も迫っていて、監視の班長は時計ばかり見て気をもんでいるようだったので、私が急遽対潜監視を引き受け、交代することにした。もしものときは、俺の宝物や甘味品など、必ず持ってきてくれよなどと冗談まじりにだれ言うともなく言いながら、双眼鏡を携え監視の兵を引率して甲板に出て、対潜監視の交代をした。右舷後方の野菜などの入った吠かますの上で、監視の要領を説明し、それぞれの位置で監視についた。

空も海も鉛色で、海は荒れ、風はうなり、小雪さえ舞い、とても真昼とは思えないほどの日和であった。だんだん視界も悪くなり、護衛艦も航空機の姿も見え

なくなってしまうた。

姿なき敵潜水艦の不気味さは、船内にいたときとは全く違い、一段と脅威を感じ、監視の責任の重さを強く感じた。いつもは夕食後、指揮班の兵に日記を読んで聞かせることを日課にしていた私は、今日は潜水艦の脅威について書こうなど思っていた。監視の兵は双眼鏡を手海面を見つめたままで、一言も語らない。

そのとき、右舷斜め前方の海が大きく盛り上がり、鯨が跳ねたようにしぶきが上がった。「あれは何だ、雷跡、雷跡！」と絶叫した。それと同時に魚雷が、右舷中央船倉付近に命中し、大音響とともに水柱がどんどん天空に上った。呆然と一瞬、水柱を見上げた。

「一発当たれば、一発目も当たるぞ」と言いながら、監視の兵と共に、最後尾の甲板へ、三、四段の階段を上り、後部の手すりにつかまったそのとき、予想通り第二弾が命中し、馬来丸は真つ二つになった。船首の方は海中に突っ込み、船尾の方がしゃちほこのように立ち、スクリューがくるくると音をたてて空中で回転した。振り返ると、海水が甲板の大勢の兵員もろとも、

滝のように船内に落ち込むのが見えた。その瞬間、ざぶんと顔に水がきて、船と共に海中に沈みはじめたのである。手すりから手をはなして泳ぎ、もがいた。白い泡の渦と巻脚絆の兵が頭上に見えた。もがいても、どンドン海中へ引き込まれていく。やがて真つ暗になり、耳も痛くなった。相当深く沈んでいることを感じた。これで俺も最期かと思ひ、目を閉じた。海底の真つ暗な所で、私一人が死んでも、身内の者も知人たちも、だれ一人として名譽の戦死をしたとは、認めてくれる人はいないだろう。悔しさと悲しさと恐怖で胸が詰まり、戦慄を覚えた。そして、無神論者と自負していた私も、思わず「神様」と手を合わせた。

その時ふと、子供の頃、田舎の堤で泳いだこと、そして深く潜る競争をして遊んだことなど思い出した。友達の顔も次々と浮かび、不思議なことに、入隊前に亡くなった母の姿までもあった。呼ぼうとしたが声がない。間違はなく母である。後を追ったが母は一言も語らず、そしらぬ顔で、我が家の明るい奥の方に入ってしまった。ああ苦しい。腹式呼吸をするような要領

で息を止めていたが、まさに目が飛び出すかと思うほど苦しい。必死にもがいていると、急にポカッと海面に浮かび上がった。深呼吸を何度も何度も繰り返して、浮遊物だらけの海面を見回しながら泳いだ。夢から覚めたようだった。海の底で、子供の頃の友や死んだ母親と出会うという、とても不思議なことを体験した。

あてもなく夢中で泳いだ。浮いてきた一斗樽につかまるとすぐ沈んだので、びっくりした。中身が入ったままの樽だったのだ。目の前に背囊や大きな魚までが浮いてきたが、払いのけながらとにかく泳いだ。ここでは長い孟宗竹につかまることができてほっとした。

気持ちがちよっと落ち着いてきて、帽子と双眼鏡がないことに気付いた。頭から足先まで痛いところもなく、海水も飲んでいなかったのが幸いで、体調はよかった。しばらくして、はるかに見える海岸に向かって、竹につかまりながら泳ぎはじめたが、波が高くて泳げなかった。ただ一生懸命竹にしがみついて、波間を漂った。その姿勢好は沼の蛙にも似て、不格好な姿だったに違いない。顎の下では腕時計のケースの蓋が開いて、

今にも海中に落ちそうに波に揺れているが、ケースの蓋を閉じることさえできない。つかまった竹から片手さえ離せなかったのである。大きな波がきて波の上から見渡すと、何百メートルもの遠くまで、半円形に浮遊物が浮いているのが見えた。波の谷間に入ったそのとき、私の近くにポカッと浮き上がってきた兵は、一呼吸するとまた沈んでしまった。どうすることもできなかった。引率した対潜監視の兵は、どこにいろのだろうか、近くに生存者は全く見当たらない。

フーツと大きく溜息をつくと、冷たい海水が服の中に入ってきて、身震いした。深呼吸をしたり、動きまわるとは、体力を消耗することだと思った。体が冷えて寒さを感じはじめた。バンドには、ロープと赤い布をつけて持っていた。ロープは握力がなくなる前に浮遊物に体を結びつけ、赤い布は絞られぬように長く流さなければならぬと思いついて、どちらも実行できず、恐怖におびえ、ただ足を縮めて、竹にしがみついているのが精一杯で、不安は募るばかりであった。また潜水艦が浮上してきはしないだろうかという

心配もあつた。

そのとき、転覆したボートの腹に、五、六人の人が立っているのが見えた。向こうの方でも、私がいることに気付いて、すぐロープを投げてくれた。しびれかけた手でロープにつかまり、引き上げられた。神の助けだと思つた。しかし、ロープを投げてくれた恩人がだれだったか定かでない。大きな波がぐる度に、ボートの腹から滑り落ち、その都度はい上がつた。二、三回も繰り返した後、立っつては駄目だということで、皆がひざまづいて波を受けるようにした。それでも滑り落ち、溺れかかった者がいたが、皆で引き上げた。軍歌を歌つて皆元氣を出そうと強がりと言つたが、寒さと恐怖で皆唇は真っ青で、言葉さえ自由に話せる状態ではなく、軍歌は長続きはしなかつた。

寒さに震えながら、どのくらい時間が過ぎたのだろうか、漁船がきて助け上げてくれた。私はすぐ汽罐（ボイラー）室に入り、冷えきつた体を温めることができた。漁船が着岸したとき、戦友を助けに、もう一度海へ連れて行つてくれと頼んだが、聞き入れられず、

仕方なく浜へ上がった。浜は夕闇に包まれていたが、浜のあちこちで、焚火が赤々とたかれていた。焚火のところを全部見て回つたが、我が隊の者は一人も見当たらなかつた。助けられた者皆が、浜の人から着物をお借りして、重湯や粥をいただいた。その後近くの寺（広泉寺）で、遭難者と対面したが、ここでも我が隊の者とは会えなかつた。ボートの上で溺れかけていた兵は、亡くなつていた。残念でならなかつた。私たちは、高台の集會場に泊まることになり、火鉢を囲んだ。まだ恐怖の去らぬ顔、顔があつた。負傷した人は、婦人青年団の人から治療と手厚い看護を受けていた。割ぼう着姿の婦人たちが、白衣の天使にさえ見えた。皆無言のまま思い思いに、濡れたお守りや紙幣などを、火鉢に張り付けて乾かしていた。乾いた紙幣やお守りがパラパラと落ちて、だれも拾おうとはしなかつた。長い一日が終つた。

翌二十六日、海岸において、日用品などの支給の連絡を受け、行く途中敬礼するのに、帽子がなくなつてまどつた。この時、帽子が欲しいと思つた。全然欲がな

かったのは、昨夜から何時間だったろうか。

海が見えてきた。昨日の海だ。あんなに大事変があった海なのに、今見る海は何の変哲もなく、静かに白波が立っているのみで、ただ真っ黒く見えるあの海のどこかに、昨日の敵潜水艦はまだいるのだろうか、どこへ行ってしまったのだろうか。姿なき敵潜水艦の不気味さが、今更のように強く感じられ、戦慄を覚えた。

また、昨日の昼食の遅れや、対潜監視を引き受け船外に出ていたことが、私の運命を変えたのではないかと思つた。「願わくば、対潜監視の兵よ、戦友たちよ、どこかに上陸して生きていて下さい」と祈りながら、薩南の海に向かって慟哭した。

ああ何と空しく、何と悲しい別れだったろうか。あれから五十年、祖国のためにきよく散華された馬来丸の戦没者、千六百有余柱の遺体は、暗く冷たい海底の藻屑となった輸送船の中で五十回忌を迎え、過去帳の人となる。御霊だけは、それぞれの故郷へ戻られ、御仏の待つ我が家に帰られたことを信じながらも、戦死された多くの人々の無念さを思うとき、栄光はどこに

あるのだろうか。ああ、語り継ぐべき者もすでに古い、時は無情にも過ぎ去っていく。

三宝に帰依せし戦友の思い出は

花の如くに散りて美し

合掌

これが、私の人生である。いろいろなことがあつたがすべて過ぎ去つたことである。

現在の平和を大事にしたいものである。

戦友に捧げる詩

戦友を焼かねばならぬ香をたく

天つ空には頼るものなし

我が戦友を焼かねばならぬ人の世の

運命悲しき今日の別れは

忠魂の御霊となりし戦友を

偲びて語る昔を今を